

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てUターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「のめしもん の 節句働き」

新潟弁の特徴の一つに「こきことば」と秘かに筆者が称しているものがあります。主に下越・中越地方で使われているようですが、ぺちゃくちゃ喋れば「しゃべっちょこき」、食欲旺盛なら「まくらいこき」、着飾れば「しゃれこき」、朝遅ければ「ねぼ（寝坊）こき」、文句言えば「野暮こき」、信念貫けば「いちがいこき」、繰り返し念押しせば「ねんだりこき」…、その人の行動や傾向に「こき」を添加するだけで、あらま、新潟弁に早変わり、という代物です。

「なんだね、あんたのことかね？」という声はこれの際無視しまして、「こきことば」の代表格に挙げられる新潟弁が、「のめしこき」。のめしとは、共通語に無理矢理訳すと「怠けもの」「ものぐさ」といった感じなのですが、何となく悪意のないように思えてくるのも、方言のもつ味わいでしょう。

現に「のめしを標準語だと思ってたて」という方も周囲にいますし、「のめしは、の・め・しです！」ときっぱりおっしゃる方もいます。高校の教科書ガイド（教科書の虎の巻）を、公然と「のめし」と称していた高校教師もいるほど、県民にとっては馴染み深い言葉と言えましょう。

さて、この「のめしこき」、切羽詰まらないう物事に取り掛からない鷹揚？な性格のせいで、おおむね土壇場になってバタバタするようです。これを称して「のめしもんの節句働き」とこれまた新潟らしい言い方をします。本来共通語では「怠け者の節句働き」と言いますが、これでは動物のナマケモノを連想してしまい、どうもピンときません。「のめしもん」と表現してこそ、他人様がのんびりと笹団子

でも食べているような節句時、ひとりあくせく立ち働いている姿を彷彿させる言葉です。

元来働き者だと言われ、また農耕社会において、それが美德とされてきた越後人ゆえ、「のめしもん」は、さぞや肩身の狭いであつたと察します。しかし「のめしもん精神」こそ、現代人にとってスローライフを地でいく贅沢な生き方では？と「のめしもん筆者」は思います。

さて、この「のめしもん」、土壇場になると思わぬ力を発揮して周りをアッ！と驚かせたり慌てたりさせることも、これまた世の習い。

これを新潟では「だんまり虫の壁破り」あるいは、「ねっそり牛の土蔵破り」（主に佐渡地方）と称するので、のめしもんも侮れません。普段静かな人に限って、他人の油断をいいことに、こっそり黙々と大事（おおごとと言うとこれまた新潟らしい）をやらかして、気付けば周りは、「おやま、びっくり仰天！」と言った時にも使われる表現です。これには、人間のもつおかしみと、したたかさが感じられ、一般的には大人しく鈍重だと思われてきた県民気質の心の内も見え隠れしています。「節句働き」も「だんまり虫」も、先人たちの語彙力と創造力、言葉のもつ面白さや奥深さを秘めた言葉です。

のめしもんでもいい、節句働きでもいい、マイペースで行こうと心のだんまり虫がつぶやきました。

